

「まだ席はある」（ルカによる福音書一四章一五〜二四節）

1 三つ目の教え

今日の箇所は、安息日の食事の席でイエスがした話の三つ目、最後の教えに当たります。

三つ目といいましたが、ご存じのように、一つ目は、安息日に人をいやすことをしてもいいかという問題（一〜六節）でした。二つ目は、例えば昼食や夕食の会、あるいは婚宴など、そうした場に招待された人の心得、招待する側の考え方、それを巡る教え、しかも「たとえ」による教え（七〜一四節）でした。それにつづくのが今日の箇所です。

いずれにしても、同じ状況、同じ食事の会がつづいているわけです。この安息日の食事にイエスは招かれて出席しています。招いたのは「ファリサイ派のある議員」、場所はその人の家です。この主催者との関係で、ファリサイ派の人々、また律法学者も食卓に着いていました。

そうした中でイエスは語られたわけですから、もちろんイエスに対し、何か話をしてくれるようリクエストがあったわけではありません。それぞれきっかけがあつてイエスは語りはじめたのです。

最初は、そこに「水腫を患っている人」がいて、その人をいやしたことをきっかけに話が始まりました。次に、招待を受けた客の中に、上席を選んで座ろうとしているのを見て語りはじめます。上席に座っていたのは、ファリサイ派や律法学者たちでした。ですからそこで語られたのは、一般的な話ではなくて、そうした人たちへの批判というか、彼らの行動、その根底にある彼らの信仰に対する、きびしい問いかけであつたのです。

さて今日の箇所、きっかけは、イエスに対する、出席者の一人の言葉です。必ずしも質問というわけではありません。

食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った（一五節）。

これに、「そこで、イエスは言われた」という言葉がつづきます。そして一つの「たとえ」が語られることとなります。

「食事を共にしていた客の一人」とは、状況からして、ファリサイ派の人と考えていいと思いますが、それだけに、この、何と云ったらよいか、イエスの教えに、あいつちを打つような、その意味で少し違和感がないではない言葉、どのように受けとつたらよいのでしょうか。

この人がこういう言葉で反応したのは、もちろん今日の箇所の前の段落（七〜一四節）のイエスの言葉に対してです。

この人の言葉は、イエスの最後の言葉、「あなたは幸いだ。正しい者たちが復活す

るとき、あなたは報われる」（一四節）、これを、彼なりにくり返しているだけでも見えます。しかし、そのようにくり返しながら、「神の国で食事をする人」の中に自分も含めていいる、その上で、よかった、嬉しい、幸いだ、と、言っているように思われるふしがあります。それに対して、今日のイエスの「たとえ」による答えは、まさに疑問を呈していたのです。

もう一つ、少しうがった見方もあります。イエスは、あそこで、招待する側の人について、お返しできるような人を招かず、お返しできないような人を招きなさいと教えていました。具体的に、「貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人」というのが上げられていました。もしそうしたなら「あなたは幸いだ」（一四節）と言うのですから、実際には、そうしない、しようとも思わないフアリサイ派の人々のやり方、考え方を批判しているのです。それをこの人も分かった上で「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言って、話題をあえて変えようとしているのだというのです。

いずれにしても、一見、感銘深く受けとめたように聞こえる言葉、しかしイエスはそれをよしとしませんでした。もしそれでいいというのなら「たとえ」を使ってなお語る必要はなかったはずです。

2 大宴会のたとえ

ただこの人の、イエスがよしとしたわけではない言葉によって、問題は、はっきりしたようです。それは、「神の国で食事をする」という「幸い」を味わう人は、本当にだれかということなのです。

さて「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招いた」。これが、イエスの「たとえ」の語り出しです。

くり返し私どもも聞いているように、宴会、あるいは婚宴、そして共同の食事（使徒二・四六）、それは旧約の昔から、神との喜ばしい交わり、神が主としています神の国を表す比喻です。

この大きな宴会、これを催した「ある人」は、どれほど心を込めて、これを準備したことかと思えます。

ところがこの「たとえ」の話は、もともと招かれていた人たちが、いざ始まる段になって、次々に断りはじめたという事実を記すことによって、急展開して行くこととなります。

宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、「もう用意ができましたから、おいでください」と言わせた。すると皆、次々に断った。最初の人は「畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください」と言った。ほかの人は、「牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところですよ。どうか、失礼させてください」と言った。また別の人は、「妻を迎えたいばかりなので、行くことができません」と言った。僕は帰って、このことを主人に報告した。すると家の主人は怒って、僕に言った。「急いで町の広場や路地へ出

て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れてきなさい」(一八〇二節)。

ここで二度使いを出す、最初、招待状を出して、直前に、また呼びに行くというのは当時の習慣です。

いつも私の(一方的な)対話の相手をしてくれるJ・グリーンという人の註解を読んでいたら、他の本から引いて、こんなことが紹介してありました。それによるとお客さんが二〇三人なら、一、二匹の鶏、五〇八人ならアヒル、一〇〇一五人なら、子やぎ、一五〇三五人ほどなら、一匹の羊、そして三五〇七五人なら、一頭の子牛がほふられた、だから事前に人数を確認しなければならないのだということです。参考になるので、申し上げておきます。

さて、二回目の使い、招待されていた人が、申し合わせたかのように、断りはじめたのです。急に都合が悪くなる、それはもちろん、あり得ることで、行けなくなることは、いまでも、したがって当時も、あったことだろうと思います。しかしここは違うようです。

じつはこの「たとえ」には、当時だれもが知っていた一つの物語が下敷きになっていたという説があります(エレミアス)。必ずしも定説ではありませんが、しかしそれによれば、ある成金の徴税人がいたのです。彼はある時盛大な宴会を催し、町の有力者、お金持ちを招待するのです。彼らと何とかつきあいたいために、金持ちとして自分の地位を認めてもらいたいためでしょうか。ところが、彼ら、招待を受けた、有力者たち、金持ちたちは、むしろその成金に好意をもっていないわけで、そこで、彼に恥をかかせてやろうと、直前になってみんな断るのです。すると、彼は怒って、食事が無駄にならないようにと、彼らの代わりに、たくさんの貧しい者たちを招き入れたということです。

イエスの「たとえ」でも、次々に断りはじめたところ、あるいはこれで理解できるかも知れません。つまり、ここでも、招待客が一樣に断りはじめたというのは決して正当な理由からではなく、招いた人に対する、はっきりした拒絶、嫌がらせあるいは無関心なのです。

3 キリストの招き

さてイエスの話を聞いていたファリサイ派や律法の専門家たち、成り上がりの徴税人が、次々に断られ、ついに怒りだし、結局、貧しい人たちや物乞いに囲まれてしまった話を思い出し、あるいはときに薄笑いを浮かべながら、これを聞いていたのではないかと思えます。

しかし、彼らの、こうした、いわば余裕は、イエスが、話の最後に、「(あなたたち)言っておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もない」(二四節)と言われたとき、事態が一変したことが明らかになったのです。彼らは、無愛想に拒否された、あの金持ちの徴税人のことを笑っていることはできなくなりました。

なぜならイエスが、あなたたちこそ（二四節は、きちんと訳せば「あなたたちに言うておく」）、私の「たとえ」の中で、このはじめに「招かれた人たち」だと、はっきり断定したからです。

ここでの問題は、「神の国で食事をする」という「幸い」を味わう人は、本当にどれかということだと、先ほど申し上げておきました。彼ら、招かれた人は、神の国にあずかれないのです。

それは、彼ら自身が、断ったからです。改めて断った理由を見てみましょう。最初の土地を買った人、不在地主です。金持ちです。彼は「見に行かねばなりません」と言っています。断るのは本意ではないけれども、自分の用件が最優先です。二番目の人、彼も金持ちです。「調べにいくところです」と言っています。行きつつある、もはや引き返せないと言っています。引き返せない用件など、人の人生に本来にあるのか疑問です。要するに、引き返す意思はないのです。三番目の人については少しは同情できます。旧約の申命記に、結婚したばかりの人は兵役を免除されるとあります（二四・五）。とはいえ三番目の人には、「失礼させてください」という言葉はありません。行けないという宣言があるのみです。しかしそれははじめから分かっていたことで、この期に及んで言わなくてもいいことです。

断った人たち、その断りの理由はともかく、土地を耕し、家畜を使い、結婚し家庭をつくる、何一つ、人間にとって重要でないものではありませんし、みな神が許してくださっていることです。しかたとえそうであっても、人間に許され、任されたことであっても、人間の営みは、神の招きの前に、絶対的なものではありません。いわば究極以前のものに究極的に人生をかけるのでしょうか。冗談でも、よいとはいえません。

さてしかし、この「たとえ」から、ただそのような召しを拒否した人についてしか、その人たちに対する警告しか聞かないとすれば、それは聖書を半分しか聞いていないことになるのではないかと思います。

僕が、「御主人様、仰せのとおりにいたしましたでしたが、まだ席があります」と言う
と、主人は言った。「通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れてきて、この家をいっぱいにしてくれ」（二二〜二三節）。

命じられた僕は、「町の広場や路地」（二一節）に行っただけではありません。町の外の「通りや小道」にまで行きます。イスラエルだけでなく、異邦人のことが念頭におかれているとも言われます。

（私とは関係ない）と置いていた多くの人は、この突然の招きに当惑せざるをえなかったでしょう。「無理にでも」という事態は、「まだ席がある」、私は私の家をつばいにしたいという神の恵みの引力です。そしてそれに従う者だけが神の国の食事にあずかる幸いをえるのです。この神の呼びかけが、いま、神の子イエス・キリストによって発せられています。イエスは十字架につけられ、われわれのすべての罪をになつて、すべての人に呼びかけておられます（マタイ一・二八）。この招きに私どもも万難を排し聞き従っていきましょう。

（三月二七日）